

学生服 心と体にマッチ

県内メーカー ジェンダーレス開発

学生服製造の全国シェア約7割を占める岡山県で、男女の性差を感じさせない制服の開発が進んでいる。心と体の性が異なるトランスジェンダーの生徒にも違和感なく着用してもらおうとの配慮からだ。

選択肢増 違和感なく着用を

菅公学生服(岡山市)は、現在では全国の小中高約800校が採用している。もともとは防寒目的で、近年はトランスジェンダーへの配慮から採用が増え



菅公学生服提案の「前合わせ」をなくしたファスナー式のブレザーとスラックス(トンプ)が提案する「ジェンダーレス制服」を手にするデザイナーの奥野あゆみさん(いずれも岡山市で)

た。2016年の展示会からは、男女で左右異なる「前合わせ」をなくしたファスナー式のブレザーを提案している。

トンプ(同市)は16年の展示会で「ジェンダーレス制服」と称したブレザーとスラックスを発表し、18年4月

開校の千葉県柏市立中 で採用された。男子用と女子用で見た目は同じデザインだが、動きやすいよう男女の体の違いに合わせて作りを変えている。

一方、同社のデザイナー奥野あゆみさん

「男性」がスカートをはくことへの世間の目を変えるのは難しいと感じる。それでも「何とか選択肢を増やしてあげたい」と模索を続けている。

商品化とは別の視点から当事者を支援するメーカーもある。明石スクールユニフォームカンパニー(倉敷市)は17年から「LGBT検定」を受けた社員30人を各支店に配置し、要望に合わせた制服選びをサポートしている。担当者は「制服を導入したら解決というわけではない。実情に合わせた柔軟な対応をしたい」と話す。



性同一性障害(GID)学会理事長の中塚幹也・岡山大大学院教授は「いまだGIDへの意識が低い学校も多い。メーカー側からの提案で選択肢を増やすことで、楽に学校生活を送ることにつながるのでは」と話した。